

在宅医療推進のための地域における多職種連携研修会

事例検討
がんの症状緩和と
多職種による在宅療養支援(前半)

* 本資料の作成にあたり、日本緩和医療学会緩和ケア継続教育プログラム(PEACE)資料を一部参考とした。

症例：胃がん術後・多発骨転移・肝転移

2年前

2年前、進行胃がんに対し幽門側胃切除術施行。術後せん妄を生じ対応に苦慮した経緯があった。退院してきたときには「二度と入院したくない」と言っていたという。

数年前から物忘れがみられていたことや年齢、慢性腎不全の合併(Cr1.8)等を勘案し、化学療法は施行しない方針となった。

1年前

1年前肝転移を指摘されるも経過観察中。

現在

症例：胃がん術後・多発骨転移・肝転移

6か月
前

6か月前に胸部痛あり、核医学検査にて多発骨転移と診断されたが、小さな病変であり治療適応はないと判断されNSAIDsを処方されていた。

屋内自立ながら、屋外歩行は転倒の危険もあって困難な状態であり、臥床している時間が多くなっている。通院が困難となってきたため、訪問診療を依頼することになった。

介護認定：要介護1

認知機能：HDS-R 19 / 30

現在

在宅導入時の状況

居住環境: エレベーターのない団地の3階に居住。

家族背景: 76才の妻と二人暮らし。妻は最近物忘れを主訴に神経内科を受診したが特段の診断には至っていない。日常の家事は行っていて今のところ生活に支障はない。変形性膝関節症や変形性脊椎症のため重いものは持てない。一人娘が同一市内に夫と中学3年、小学3年の子供2人の4人で居住している。娘は平日の午前中はパート勤務に従事しているが、午後なら両親宅を訪れることは可能だという。

病状説明: 家族へは多発肝転移の進行が著しく、予後2~3か月と説明されている。

グループワーク 1

1か月位前から右側胸部をさすっている様子があり、たずねると「痛いね」と顔をしかめるため、来月の外来で相談しなければと妻や娘は考えていた。全身倦怠感や食欲不振もみられる。

導入時点での治療方針（処方例を含む）、今後起こりうる病態や予後因子について医師が他職種に向けて解説してください

司会：病院職員
書記：地域包括支援センター職員
発表：医師